

## 久保田米僊とジャーナリズム——ディオシー『新極東』挿絵の検討——

森光彦（京都市美術館）

久保田米僊（1852-1906）は、明治期京都画壇を牽引した日本画家である。明治10～20年代初めには京都において、京都府画学校や京都美術協会といった近代的画家組織の設立に尽力し、明治23年（1890）以降は東京へ拠点を移して、徳富蘇峰の国民新聞に所属しながら画報記者としても活動した。内国絵画共進会など主要展覧会で受賞を重ねるなどして活躍し、日本画の近代化が模索された時代に、「日本画の新機軸」を標榜し意欲的に制作を行った。

米僊作品は、絵画表現においてはその基礎に、円山派や四条派といった近世からの流れを汲みながらも、制作理念については、従来の日本画にはない新しい考えを取り入れて新時代の社会に対応しようとした。そのひとつとして掲げられたのが報道するための絵画、すなわちジャーナリズムに基づいた作品である。

日本画家でありながら新聞記者としても勤めたという経歴から、米僊と報道の関係については今西一などの先行研究においてメディア史上の価値が紹介されてきた。明治10年代には『我楽多珍報』（1879創刊）などいくつか新聞創刊に携わり、そこで主に挿絵や風刺漫画を描き始め、のち様々な媒体で記事を多く手掛けた。国民新聞入社後は本格的に報道に携わるようになる。これらと並行して、自身の体験を反映したいくつかの作品集を出版などしており、パリ万博に際し渡仏した体験を描いた『米僊漫遊画帖』（1889）、日清戦争に従軍した成果を描いた『日清戦闘画報』（1894-95）などがある。

こうした活動の背景には、出版という近代メディアの登場があるが、米僊はこれに積極的に関与しながら、日本画においても多くの鑑賞者へ社会の状況を伝え、啓発するという社会的役割が重要だと考えるようになった。それを「絵の用」と呼び、報道の理念に基づいた歴史画や戦争画を制作している。

こうしたなかで、これまでほぼ言及されてこなかったものの、注目すべき作品がある。米僊が明治31年（1898）に制作した全12枚の絵画で、アーサー・ディオシー（1856-1923）がイギリスで発表した書籍『新極東』（1898）の挿絵である。ディオシーはロンドン日本協会の設立に関わり、理事長を長く務めた人物で、『新極東』は日本を中心に朝鮮、中国の社会を紹介する目的で書かれた。米僊はここに、江戸期の日本と明治期の日本という新旧を対比する形で日本社会を表し、また日清戦争従軍時に実際に見た朝鮮と中国の光景を描いている。本作にはそれまでの米僊の取材が存分に発揮されており、報道の理念の実践が表れた晩年作といえる。

本発表では、まずいくつかの作品と言説を通して米僊の理念を確認し、さらに『新極東』の挿絵を紹介、検討することで、いかにしてそれが達成されたかについて考える。結論として、本作にも確かに「絵の用」が反映され、日本画の新機軸を目指した成果であったことを明らかにする。